

たより第57号目次

情け・五月雨・縁の系  
西松 布咏  
粋なばかり  
三好 満

再起動とは「道」と見つけたら  
福岡 俊弘

美しかった、師匠の左手  
高橋 幸治

ドルフィーと師匠  
縄岡 好人

平成十九年公演他

二月二日 NHK FM

ラジオ深夜便 こころの時代

「三味線に託した半生」

二月十七日(土) 原宿・月心居

第四回 季の会

二月廿五日(日) 新潟岩室温泉 高島屋文化サロン

三月廿四日(土) 赤坂・泉クラブ

第三十三回 美紗の会のつどい

四月廿一日(土) 岐阜・たか田八祥

春を味わふ

四月廿一日(土) 多治見・ギャルリ

夜のお楽しみ

ももぐさ

五月廿六日(土) 原宿・月心居

第五回 季の会

六月廿八日(木) 虎の門パストラル

NPO法人 薦ぐらぶ 邦楽三昧

七月廿九日(日) 四時より

岐阜・かわらや

夏の粋を唄う

十月七日(日) 二時十五分～三時

神田外語大学・講堂

ケネス・レックスロス・シンボジウム

「魔利支子のうた」を三味線で唄う

十月廿日(土) 一時より

赤坂・泉クラブ

第三十四回 美紗の会のつどい

美紗の会一門演奏会・交流会

十月廿七日(土) 六時より

原宿・月心居

第六回 季の会

四季折々の唄と精進料理の出

違い

十二月七日(金) 七時より

渋谷・セルリアンタワー 能楽堂

第四回 虹の会

意・こころのかたち

共演

花柳 千寿文 (舞踊)

中村 明一 (尺八)

田中 優子 (お話)

情け・五月雨・縁の系

西松 布咏

毎年五月三十日に、大原三千院で後白河法皇から伝承されている御儀法講が三十年前から続いており梶井宮御流・藤原素朝家元が献花なさるとうかがった。家元とはまだ浅い縁ではあったが、その昔今は亡き石川澤月師の「月の会」での季節・情け・五月雨・縁の系を思い出し、是非貴重な法要に参列させていただきたいと新緑の京都へ向かった。

その日は由緒のある法要なので着物姿でと思っていたが早朝から降り続く無情の雨にあきらめて、三千院からほど近い寂光院へと立ち寄った。高校の修学旅行以来の訪れである。平成十二年五月九日の放火で全焼し数年前に再興されたものの、当時の多感な乙女心に刻まれた建礼門院の悲しみを海に沈めた面影は偲びがたく、諸行無常の響きあり盛者必衰の理を、ことさら感じてしまった。しかし雨のおかげで、今稽古している小唄「黒木売り」の大原女のモデルは建礼門院に宮中より仕え、最後までお傍で見守った阿波内侍と知ることができた。又全焼しても菩薩立像の胎内に安置されていた六万体の地藏尊がご無事であったことは殊更に御仏による情有りの難さを感じた。

定刻前の三千院極楽院にはすでに五百人程の参列者が座し、阿弥陀三尊像の御前には家元による一対の白菊のご生花が清らかに献上されていた。十一時の三番鐘の合図でご門跡の小堀光詮大僧正が入堂され厳かに後白河天皇の御簾を巻き上げ、京都寺院式衆の礼拝により法要が始まった。ともすると声明の有り難い響きや平安雅楽のゆったりとした妙なる調べに眠りを誘われたが、時折の激しい風雨の音が祈りの心を呼び覚まし、仏の来迎を感謝し心身を整える懺悔は二時間にわたり厳かに続いた。毎年どんな悪天候でも法要が終わるころには・・・と家元が仰っていたが不思議なことに雨はびたりと止み雲間から光が差し始めていた。六年前の隠岐神

社でも、昼間は嵐のようだった雨風が後鳥羽上皇配流七百八十周年式典が始まり、私がイヴェントで上皇の御歌を境内で歌う頃には夜空に星が輝いたことを思い出した。やはり一心の祈りは神仏に通じるのであろうか。五月雨にけむる大原の里は、墨絵のような山々を背に「黒木売り」の、鐘の音に大原の野菊さし添えて情け下露しつとりと濡れて・・・心に残るひとときであった。

翌日は相国寺承天閣での「若冲展」を観た後、金沢へと列車の人となった。久しぶりの一人旅の不安は、車窓に映り行く雨に濡れた鮮やかな紫陽花と縁の木々がいつしか静かな旅情へと塗り替えてくれた。

金沢への旅は、四月の「ギャルリももぐさ」での唄を聞いて下さった縁の丸八製茶場の丸山氏がきっかけだったので、そのお店に近い東茶屋街の近くに宿をとったものの地理に疎い私は路地をうろろろ・・・やがて見覚えのある道・・・と思ったら、以前訪れた「三味線の福島」の懐かしい店に行き違った。七年前に旅の途中で象牙の糸巻きが割れてしまい探し訪ねた店。町家風の二階座敷に上がり修理が終わるまで、見学に来ていた外人客に三味線を聞かせた思い出の店。そろそろ自分に似合った三味線を仕立てたいと一念発起した二年前、職人気質なご主人の技を思い出し、はるばる淡雪の降る冬に訪れた店。すでに閉店した硝子戸を見ながら不思議な縁の糸を手繰り寄せているうちに、露地を曲がると、ようやく宿にたどり着いた。

部屋に荷物を置き足の向くまま歩いて

いると、すでに人通りはなく夕闇だけがあたりを覆う路地は、まさしく鏡花の世界の現実と幻想の逢う魔が刻。懐手をした着流し姿の鏡花がすうっと出てきたり、ほう





ずきを口にした白粉を塗った浴衣の女の子が駆け出したり。浅野川沿いの川原に目を落とすと、遠い空を眺めている滝の白糸の後姿が・・・やがて天神橋を渡り弁柄格子の奥から三味線の音が聞こえてきそうな主計町を歩いていると、暗闇坂からぶつと魔物や雲がささやいてくるような気がして怖くなり現実に戻ると、角に古い二階建ての民家風の蕎麦屋が暖かい明かりを灯している。二階に上がると広い座敷にちゃぶ台にせんべい座布団。客はと言えば裸電球の下で静かに語らう小さな男の子を囲む夫婦だけ。私は庭が見える隅に座り、大根おろしと釜山菜をおつまみに、加賀の銘酒「黒帯」をぬる燗でのんびり味わっている。壁際のスピーカーからハーモニカの音がかすかに聞こえてくる。やがて親子連れもいなくなり、ひとりの座敷の闇はますます濃くなってきた。赤とんぼの童謡はどこかの公園で吹いているらしく、ハーモニカの音に蝉の声と子供相手に朴訥なおじさんの話し声が混じり、いつしか私もその世界に浸りなんとも懐かしいひと時だった。ほろ酔いで階下に行くと店主が「おひとり優雅にお酒を飲んでいらつしやる姿が絵になっていて嬉しく拝見してましたよ」と手のひらに小さな瓢箪のあられを数粒載せてくれた。夢心地のうちに夜遊びをってしまった子供のよう

にかえ下駄をカランコロン鳴らして土蔵のような銭湯に行く。たつぷりとした湯船に浸り「露地のほそみち駒下駄で胸おどろかす明けの鐘・・・」と端唄を口ずさみながら金沢の夜は更けていった。翌朝は雨上がりの卯辰山を峰続きに散歩したあと、東茶屋街にたずむ茶房「一笑」を丸山氏に案内していただく。一階は 繊細な木目を大胆に生かしたしつらいとシックな土壁の色との妙がモダンな雰囲気漂う中で日本茶や抹茶を味わっていただく茶房。それとは趣きを変え二階はあくまでも既存の修復にとどめたと説明して下さった座敷は、まさしく典雅な加賀文化が髣髴と浮かび上がってくるような風情が漂っている。東茶屋街は天保二年に一旦廃止になりながら幕末の慶応三年には再び公認され市内随一の格式と賑わいを誇る茶屋文化を受け継いでいる。目の細かい弁柄格子を施した家並みは、中から外が見通せるが外からは見えにくいという日本建築の技が趣きを増して三味線の音を聞くにはふさわしい場になるのでは・・・と「ももぐさ」を訪れた時のような心の高ぶりを感じた。「一笑」の屋号は芭蕉の優れた門下であった元禄期の加賀の俳人小杉一笑に由来する。旅の途中で弟子の訃報を聞いた芭蕉は、塚



も動け我が泣く声は秋の風」と詠んだといふ。いつの日かこのお座敷で「涙かくして送り出し二階座敷で見ていたら一足づつに遠くなる・・・」という小唄を江戸の二人に届くようにしじみ唄ってみたい」と、情け・五月雨・縁の糸・の旅の終わりに思った。粹なはからい 三好 満 或る日、人だかりを覗いてみると、大道芸人が独楽回しをやっていました。懐かしい思いで暫く眺めていました。芸人は独楽に糸を巻いたり回したりし乍ら前列で夢中になってそれを見詰めている子供達に楽しそうに話しかけながら色々な独楽芸を見せていました。直(じか)かに一人一人の子供に話しかけているのですが、子供たちは関心が有りながら誰も無表情で芸人の質問に答えようとしないので、終にその芸人は子供達の後ろで見ていた親らしい人に聞いたのです。「知らない人から話しかけられても返事をしないように子供に教えているの？」するとその親らしい人は只一言「うん」とそれを認めました。それを聞いていて、保育士たちの集まりでも同じような話題が出たことを思い出しました。その時も今度の時も自分の中に何か変だなあと云う思いが湧いてきたのです。只そのような社会的傾向を変だと思っ自分の方が変で、今の世の中の傾向の方が、正常なのか自信が無くなってきたのです。 何で、長々とこんなことをお話したのかと云うと、そんな思いに悩んでいる時に西松布

つた時の自分の中に起き始めた一種のカルチュアルショックがあまりにも大きかったからです。忘れかけていた日本人としての原点とも云うべき「人情」とか「粹」の世界が、まだこんなにも生き生きと存在していたことの驚きと喜びは日増しに私の中に成長してきました。然もそれは邦楽なら何でも良いと云うのではなく、偶(たま)また私が布師匠の三味演奏に触れる機会が最初であったからかも知れませんが、と素人である私にも布師匠の唄ものと云うのか三味線の素晴らしとその中に語られる「粹」は生きていて良かったことと、去りし日々への懐かしさを私の中に呼び起こして呉れたのです。それは私の年の故が異常さの故なのか分からないのですが、素晴らしいと云はれる西洋音楽をいくら聞いてもそれだけで、懐かしいと云う感情は起きてこないのは私だけなのでしょうか。 西松布唄お師匠の演奏会に初めて出会った時と場所については電碌(もろく)しく始めていた私の頭では定かではなくなっているのですが、何となく記憶の底に残っているのは、初台の国立劇場で一寸前衛的と思えたミュージシャンとの共演の場ではなかったかと思えます。その後は確か銀座ライオンのホールでの落語家との舞台、目茶苦茶に楽しかった落し話と対照的に江戸情緒たつぷりの布師匠の唄と三弦の世界が不思議とマッチして百年位のタイムスリップをして生きているかの様な感覚を覚えていきます。更に原宿月心居での季の会の感動、シックで古き時代を感じさせる建物の中座敷での演奏、少人数でもったいない観客を前にした演奏と終わってから供された精進料理の醍醐味、良かったですね。 どちらも。 さて、そんな夢のような思い出ばかりではなく、是非とも少しだけお話ししておきたいこ

とは糸と唄をつなぐ、問の素晴らしさです。素人の私が言うことではないのでしょうか、小唄・端唄の絶妙なる「問」には圧倒される思いです。特に地唄の間のとり方、その間のうちに、にじんできてるイメージの語りは聞く程に何となく涙をにじませてくる程の気がいたします。若しこれが寝れ過ぎだとか仰るならば、聞くも淋しき独り寝の枕にひびく声なき恋と見過ごして下されや。

さて長くなりましたが、去る二月廿五日、新潟県若室温泉、高島屋での師匠の演奏会に参加させていただき、私の人生に於いて初めての新鮮な感動を、惚(ほ)け果てるまで忘れることはないでしょう。黒髪(くろかみ)の解けて寝(い)ぬ夜の春の夢、川端康成の『雪国』の中の芸者駒子が爪弾く「黒髪」を布唄師匠の生の演奏で聞かせていただいた感動は私の夢でした。只、宿の庭にはある善の白雪は全く見られなかったのは異常な現象であつたかも知れませぬ。その夜、宿の前にあるカラオケバーで聞いた師匠の「悲しい酒」は「ひばり」より深みを感じ、思はず涙の出る思いであつたことも私一人ではなかつたと思います。そんなこと、あんなことなどこれからの私の短い人生に生き甲斐と色を加えてくださった西松布唄師匠を恋しながら出来る限り追っかけさせていただく夢を見ていきたいと思つています。最後にそんな機会を作ってくれた吾が友、山中幸子氏と門外漢である私を温かく粹に受け入れて下さった美紗の会会主と会員の皆様方に改めて心から感謝する次第です。

## 再起動とは「道」と見つけたら

福岡 俊弘

三味線のお師匠さんが、自宅のインターネット回線をBフレッツ光に変えた。が、変えたものの、ネットにうまく接続できないのだという。パソコンに詳しいほかのお弟子さんたちがいろいろといじって見たものの、どうにもつながらない。そこで、新参者のワタクシの出番となった。

職業柄、他人様のパソコンを直せ、と言われることは多い。トラブルの中身は様々だが、自分に相談されて、問題がちゃんと解決されたというのはマレである。ちなみに今年は一勝三敗。その一勝は、高田馬場のカレー屋「夢民」で、お店のオーナーTさんのメールトラブルを偶然解決した一件。あとは、以前に書いた、南の島での悪戦苦闘など、ほとんどは何の解決も光明も見ずに終わっている。

「F岡さん、ちょっとパソコンを診てくださりませんか？」

わが師匠は、着物のカタログから抜け出たような、今の季節なら古風な日傘が世界でもっとも似合う妙齢の女性である。稽古のときの厳しい口調とはうって変わり、ふだんの言葉の響きには、微かな色香がこもる。わずかに鼻にかかった、それでいてハリのある声がそうさせるのだらう。そして、この声で頼まれると、決して「イヤ」とは言えないのだが、しかも「診てくださりませんか？」の、最後の「ん」の音に、有無を言わせない強い調子が含まれている。

師匠のリビングでパソコンを立ち上げ、ネットに接続すべく、作業をすること二時間。案の定、うまくいかない。デバイスの設定を変えたり、終端装置を調べたり、自分が考え得るすべての方策を試してみたが、どうやってもパソコンからはエラーメッセージが返ってくる。で、そのたびに「再起動」。一体、何度ウィンドウズを再起動させたことだらう。

ハードディスクがブーンと唸り、呪いの文言にしか見えないBIOSチェックの文字列が表示され、おなじみのアイコンがうんざりしたように現われるまでの時間。ひたすら待つあの時間。「再起動」とは、このときを平常心に保つための稽古なのでないのか？ そうか！ 「道」なのだ。再起動の「ど」とは「道」のことだったのだ。よし、明日から己が心を鍛えんがため、精神一到、再起「道」に邁進せん。

## 美しかった、師匠の左手

高橋 幸治

今年二月末に行われたある会合でのこと。「松岡(正剛)さん、どうも。実はですね、三味線をね、習いたいんですよ。で、師匠ってどうやって探せばいいんですかね？」「三味線？ 師匠？ うん、そうね、ああ、あそこにいるじゃない。ちょっとちよつと、西松さん、面倒みてあげて……。いま振り返っても、あり得ないような偶然でした。現実のスピード感に気持ちがあつたく追いつけないというか、正直、「いや、あの、僕、こんなにスゴい師匠じゃなくても……。」という感じ。相当、ビビりました。マズいと思いました。



こんな自分が西松先生のもとに入門なんかしてしまつていいのだろうか。しかしそんなダメ弟子の志願を師匠は快く受け入れてくださり、この七月で、稽古場に入りするようになって早四力月の月日が流れようとしています。

師匠のもとにうかがうのはほとんどが土曜日で、お稽古の最中は、もう、まったく余裕がありません。日々の仕事ではほとんど發揮したことがない極限の集中力で師匠の唄と三味線を記憶に刻み、いざ自分が唄う、弾くとなると、バチ、棹、譜面のあいだを視線がひたすら高速に巡回するという、なんとも滑稽かつ情けない状態です。はか／＼さあ／＼あ／＼さあ／＼「それじゃ、せんせん鬱くないでしょ？」はい(汗)。「む／＼り／＼なあ／＼あ／＼さあ／＼けえ／＼」それじゃ、せんせん無理に飲んでないでしょ？ はい(汗)。「毎回こんな感じですよ。」

なので普段のお稽古を離れ、師匠が演奏される姿をリラックスして観ることができたのは、五月二十六日の「季の会」がほぼ初めてでした。観ているだけです。これはもう楽なものです。さてさて、照明が落ち、からくりめいた仕掛けの襖が縦横にがらりと移動すると、初夏らしい、涼やかな着物姿の師匠が現れました。そこにいるのは紛れもなく自分の師匠なのですが、どことなく近寄りたいたい妙な気分。それからの時間がいかに贅沢なものであつたか、いまさら言うまでもないでしょう。あの場にいらした方々全員が、同じ緊張感と同じ浮遊感、同じ心地よさを共有していただろうと思えます。しかし、恐らく、私だけが執拗に見つめていた、師匠のある部分があります。それは、手です。軽やかに、舞うように、滑るように、三本の糸の間を自在に往き來する左手です。美しい指の運びが

美しい音を誘い出し、美しい音の調べが指の運びの美しさをさらに際立たせる……。お稽古中、これを見ているように見ていませんでした。もう、呆然です。

あのとき頃も三味線もしっかり聴いていましたが、私は師匠の左手の美しさにすっかり気を取られ、ただひたすら見つめていました。

「季の会」は師匠の偉大さを改めて実感した会であったと同じ

時に、今後、師匠から学ばなければならぬものがいかに多いかを痛感した会でもありました。指先一本までも美しく……。師匠の佇まいすべてにまで意識が及ぶようになるには、あと何年かかることやら……。まずは一步一步、頑張っていくことと思います。

みなさま、どうぞよろしくお願い致します。



## ドルフィーと師匠

縄岡 好人

「あなたはジャズ演奏家で誰が好きですか？」と問われたとき、真っ先に頭に浮かぶのがエリック・ドルフィーの名前である。彼は、アルト・サクソ、フルート、バス・クラリネットを演奏して独特の音世界を築きあげ、五十年代から六十年代前半のモダン・ジャズ全盛期を全力で駆け抜けて行った。彼は三十六歳の若さで病死してしまうのだが、何枚ものアルバムにその足

跡を残している。私は彼のバス・クラが大好きだ。この大きくて長い管を持つグロテスクな楽器は、彼にだけ心を許したかのよう、あつちこつち跳ね回り、馬のいななきのような魂の叫び声をあげる。ドルフィーの音楽は現代の癒し系と比べると武骨で難しげなのだが、唯一無二のジャズサウンドの底辺には強さとともにやさしさが流れている。大学時代の四畳半で覚えた典型的なジャズ中毒症状は今も続いていて、聴くたびに一種の恍惚状態に陥る。彼の名盤『ラスト・デイト』には、「あなたが今、耳にした音楽は空中に消えて再びそれを聞くことはできない」という彼の言葉が収録されている。

西松布詠師匠のCD『傳』のライナー・ノート(田中優子先生記)を読んでいたら、「あるとき西松布詠はこんなことを言った。幸田露伴は晩年音は幻とつぶやいたと言います。まさしく三味線の音は消えて行く露のようにはかなく、時として雪のように降りつむ孤独のささやきにも思えます。だからこそ男女の心のひだが時を越えて三筋の糸で紡ぎ出されてゆくのです。と……。私はたしかに布詠さんの三味線の音からつかのまという時間の切なさを、その切なさの中で生きる人間たちの物語を、聞き取っている。」と記述されていた。

師匠の唄には、つかのまという切ない時間の中にやさしさとともに強さが底辺に流れている。ドルフィーと師匠は時代も音楽のジャンルも全く異なるのだけれども、師匠のライブにはドルフィーを聴いたときと同様の言いようのない不思議な魔力がある。さて、今日のライブは、薫くらぶ主催の『邦楽三昧』である。会場は虎ノ門パストラル新館六階のロゼの間。会場に入ると、ひとテーブル七人ぐらいの丸テーブルが複数セットさ

れており、これでデコレーションケーキでも飾ってあれば、まさに結婚披露宴会場でのディナーショーという設定だ。ああ今日のライブは外れだったかと内心がっかりしながら席に着いた。テーブルの上には、資料が用意されており、「かつて儒学者に淫楽ときめつけられた三味線音楽も新内、常磐津、清元、義太夫、地唄、端唄、小唄などなど、色々あります。残念なことになれがどんな音楽か、欧米文化がぶれの我々にはさっぱり分かりません。長唄、地唄、小唄、富本節、端唄、俗曲、新内と、幅広くこなす西松布詠さんが登場するこの機会に現代人共通のこの悩みを解消してください。」と書いてある。そういえば、薫くらぶとは、「つたえる・つたわる・伝統文化のネットワーク」をモットーとするNPO法人だった。少し期待がもてそうだと安心した。やがてテーブルにはワインなどが運ばれ、オードブル、肉料理などを食しながらゆったりと歓談。一時間ほどして、師匠の登場である。先ずは端唄・『緑かいな』。ついで、俗曲・『木遣りくずし』、小唄・『晴れて雲間』、『対浴衣』と続く。

私は最後列で立つて聴いていたのだが、洋風で硬質な会場は全く気にならなくなっていた。むしろ会場の硬い殻の中で、師匠の唄を中心として聴衆が一体に溶け合っただけの和している雰囲気を感じていた。そのような雰囲気の中で、歌沢・『嘘とま』と、新内小唄・『夢の柳橋』、富本・『豊後節浮名読売』、長唄・『都鳥』と、これらの異なるジャンルの唄いものを師匠は弾き唄い分けていく。そして地唄・『黒髪』で演奏は終了した。今回のようにさまざまジャンルを師匠がまとめて一度に唄われるのを聴くのは、はじめてであった。ドルフィーの三種類の演奏と同じように、今夜も師匠のすべが私の中を駆け巡った。当たりのライブだった。

## 編集後記

五月に装いも新たな56号を発行し、これでほととしまらく一休み。と、思いきや二ヶ月も経たないうちに早くも次号の企画が……。これも美紗の会が活性化している証かとうれしい悲鳴の編集作業でした。本号に寄せられた原稿も個性あふれた熱いものはかりです。きつと鬱陶しい梅雨を吹き飛ばしてくれらることを思います。

(2)



たより第57号

発行者 美紗の会  
編集責任者 大久保 朋子

美紗の会

主宰 西松 布詠  
稽古場 港区白金台三二二二  
白金台ブレイス三階

電話 (3441) 2726  
(5447) 2412

<http://www17.ocn.ne.jp/~misa5/>